フィールド（現場）からの風 513

宮田守男

地場産新米を提供できる体制を

秋の深まりに朝夕に寒さを感じる9月末日。明日からの10月は神々が出雲大社に集まり、日本各地で神様が不在になる事から「神無月」と呼ばれている。出雲大社に集まる神様が話し合う議題は、平和・気象・感染症・景気動向・縁結びなど多岐に渡るのだろう。実りある話し合いを期待するばかりだ。

総務省が敬老の日に人口推計を公表した。高齢者が最多3627万人、75歳以上は初の15%超えで高齢化率は今後も上昇する見込みで課題の困難さを改めて浮き彫りにした。浜松市では「安心していきいきと暮らすことができるまち浜松」の実現に向けて「やらまいか型人生年齢区分」を導入。65歳～74歳を「まだまだ現役世代」に、75～87歳は「いきいき充実世代」、88歳以上は「かがやく悠久世代」として、人生の後半に入ってからも前向きな気持ちが大切と宣言している。

とかく加齢とともに物忘れがひどくなり、だんだん頭も悪くなってきたとの話を聞く機会が多い。福島民友新聞の編集日記で英文学者の外山滋比古さんの考えを紹介した。ものを覚えることを食事に例え、食べ過ぎて消化不良にならないよう大事な事だけ残して後はごみとして出す。これを頭の中でやるのが「忘れる」ことだと。

台風などの天候不順で収穫作業が遅れたが、今週に入りコンバインの収穫作業が急ピッチで進められている。いつも思うのだが9月に訪れるお客さまは、食事のご飯は新米と期待しているのではないだろうか。収穫したての新米は水分を多く含み、炊くとふっくらとやわらかく、甘みのある味の良さは格別だ。

だが米は精米直後から味が落ち始めるのも事実。この時期の新米をお客さまに提供したくても新米の地場産米が店頭にほとんどないのが現状だ。古米の使用を優先させたいのではなく、観光の原点である地場食材の提供体制を確立する取り組みが大切だと農業関係者・観光関係者・米販売関係者が前向きに理解する事が、地域経済の活力を生み出すに違いないと考えるべきなのだろう。

基準地価の発表で白馬が高い上昇率との報道で久しぶりに村内の現状を見て回る。想像したよりも数年で新築された建物の多さに衝撃を受ける。あまりの多さに行政サービスが対応しきれるのか逆に心配になってしまう。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

毎年稲作を楽しむグループ。手刈りでの作業風景は懐かしい昔を思い出す